新撰

俳諧七部集

四

中村俊定文庫
文庫 18
854
4

六の巻

月はゆふべあたれる雲の時と
なりてちーと世のあはれみる樣し
さてんたちやうのこゝろふかきと
祭主ともあるべき人もあるぬ
老比丘尼ふと考れた
やうにもあるべき事なるべ

事一生をれいろれ　そねるい向み
ものと事ゆ出き鏡あるい里
学に過ぶれ以ひ明んあくと一雨
年れ多くとこ雨も意とれ雨あ
ア〳〵古年事ゆ雨ばあば
もるもと鄭ゆ考とい明竹ね

尾陽　井蛙序

其一　百鶴一折

以〳〵野雪ゆころふ而まく　羽
故人名れ多れ以ゆの　以之
面白や鐵也餅も以〳〵以〳〵　勢州　麦林
馬ゆ多る世る抱い明一　普古
山れ雪つ〳〵蔵る早苗時　租笋
杜律ゆ弾れて弾れ世る　春波

十五枝ハ十三枝ハあれやし　杜蕎

いすりあるく話も秋の暮　桃如

石ひゝ本性の新れ石菓子　之林

新地の茅屋平野地ちひる　石蕎

胴絵ゝ十石舟を明く重き　波岸

松れそゝ石れ宮ゝ合ゝす　蕎

ゝ達れ居宗をすゝ寺号ゝ　波

明ゝ敷ゝ出ゝ十ゝ山ゝる　蕎

初れ弱ゝ涼ゝいひやしもの　如

乗れ身乗れケシゝあふ水ひ　石

伊達ゝ胴ユゝゝれ灯籠　蕎

達ゝ矢ゝと思ふ三日月　蕎

屋峠れ雨も降ゝぬ江雑の美　波

白れ鉄ゝ祈れ開帳　如

泰宗とれもをゝく開ゝく　林

柳の陰ゝ芋れ　笠

蕎

其二　百敷を尾

和歌の浦に紀氏祭のたいまはや　三角

椽の宮さ玉振ふ榊葉　長嶋　素水

幣のごとうぬ耳を持くぬて　以之

世獻立れいまにたまるす　丁牧

石月琴山と毋ゑの伸間砂　琴市

石拍ごろにはつる秋風　巴蟬

是吹る壁所此大此此流　呉春

日本牧本此後ゆ有る　楊笠

小てろに姫入此ゆ法を見就　戎井

毋ゆ温ゆく帳てるの風流　万垂

恋ゆ京ゆ京も雑ゆ毋ゆ見る山　水

砂ゆく返す詩此多り　之

石此ゆる木屋も大ゆ事書　牧

野此多寺此多記キ　市

幕打てたすいあてもなし　笠

能なし柿葉の茶を煮て　吾

其三　歌仙一折

酒なしに酔ふ寒の松風　芭

年も石ばし揉除なきる　嘯花

る二上美（ゆ）ふさうさて　横氏　素分

帽子あれる風をうる　吟之

ひんと照る七相の新月　和石

れ出れ来し遠夜演劇　宋布

ウ　平茶の毒を聚る高楽　巴静

高今来く文を注せる　分

面白い農ふ陸の高山　花

夜も桃を知る義う　石

乱るあちぬ乱るゝ時を待ぞ　之
ぐるる事こゝの吉原　静
月もおそ北日ゐ出おれ世分別　布
稚迦も相撲ハ弓れと吹れと　毛
三河ゝ毛に北秋も酔て　分
四の毛ゝ能ハ舟ゝ出く　之
高野ゝ根北生るも数宗や　石
ゝ花北華ゝ北時ゝ　布

其四　欲仙首尾　三四

ゝるをゝく御ゝ事北あゝと哉
所ゝゝゝ北新ゝも成るは　ココロモ　荷傘
北ゝ北書に高人ゝ異ゝみと　カカサキ　胡蝶
忘れ乱異北ゝてゝゝや　は　幟巷
待北ゝ空ゝゝ月北ゝゝゝ　吹て
ゝゝ北掘ゝハ葉ゝゝゝ　カカサキ　夫一

一ふを百くさこる秋の風　日　秋色

室家も年もあたぬ世界　中カイト　孝也

たゝこやの礎ひく杜若　ヤリヤ　吐虹

幕面いたれく第佇く　東ウラ　之峯

花の名に書老の重の竹　西木　柳吾

二月朔日　巴蟬

其五　雄高松にあり　高

和尚や掛うるとき原始北上

日鄙の思るれる苔　山林

商ふやすべい詠ふ屋こそ　葉中

あれい若い新れあいい　唯人

世北条の伏ふ君ある月　鼠朱

彩まもちく一松露　ゆを

雀啼 佐北為おもと葉 北葉 家

無つ陣つの心を尋てみる 高蘭

蓮華を高く咲く 猛北 諸おひ 巴静

宇佐北葉 黄も高人の山 和本

地に伸て 筆よ花見り 朴

葉 苗あ すも 猫よ 投 中

農夫 人 蒙 踏 佐 ぬ り 人

郭 る を 尺 て る え り 北 屋 来

庫 さ も 明 ら ま 夕 雪 雲 之

机 北 上 よ 南 ら の 寒 泰

郭 明 て 松 さ 北 く 明 蛙 や の 可

流 石 氣 鶴 も る 香 や ら 蔭

鳥 蛙 月 松 ら す い ま も 時 静

理 上 戸 北 こ ゆ る 松 坂 木

駿 ゆ も ゆ る 新 芸 寒 北 あ る 氣 時 朴

知 ひ て ゆ る 知 る の 蕗 の 古 人 中

人

代弥をもて所の名なる也 来
松はみどりもすかなる 本

其六 平仙

市人のいとまをうかんと笠はかる 二日
都はの所を訪ふ花の春 巴静
蹴うつ雨の音をきくはいかに 花杞
降て松をさす相はの海はい 素豚

ふるも月はかりの峠 比雄
はひやくゆゝ井戸のこゝろ 牛歩
尺相はもとるとい西の風やい いくこ
なるはいなるなるを如る云 流桃
御屋敷のゝ番屋やい続くり 有架
梅も咲ぬるかはれ 百陀
笹咲くおそひのあるく 麦士
仔馬なる毛虫をなる 杞

枕木にあまつさを靡る稲つるする　靜
ひかりより佐比押栖　雛
河北ゆゑ稲ちつにやる月　豚
稲ゑ其いまてこかるゑ米　之
節小秋稜んてゑんすもゑ花心　陀
稜てまてゑる書雲愛表　架
此件もちつと調市あてゑて　枕
内いひ豆北奇素好市　士

稲ゑ北あてひゑ小船とあてゑ　枕
愛ふてあさまのやるゑれ　靜
さく乾北ゑてゑてゑいてるやゑ　杞
帥を北宿北稜ゑ毛系　豚
相談ゑ一人ぬけれい譯也一　諏
人宣北歟もあれは歟ゑハ　枕
爲稲北月北ちえハ十五日　之
生徐や稲の要ゑ好て　枕

清子様の俳諧此春地下ゆ
正明二年ちかく百年の
庭柳又矢拵をはる表そ
嵐雪とゆを百生此物
を持此肩ゐちかく切るる
花見をなりうそに野
也此やしいまそ此生乃理
何やゆすする糸此

案　佗　士　杞　孫　誰　静　之

春日　春夏秋

墨ゆくゆはるる花の吉野山

此一章は清の頃の老人のそと此
年月我影をもやはの
紅りもをすくゆ感ーさもなまし
芳野たもの白ちをれそれ於ふち
世くの撰集るあらるも其日
ろ此時るあるる春ー

教ようとて軍出るかな　去節山

件一章は其華宗の師の紀りなる
其行の難陳なる故に且く去聖
なる對一〇者なる一宮の紀所
也は彼宗玄老人此毛のるを
こゝに其はやそは我も山なる極ひ
〇其法を師とすべきなり

よりはゆる石丈の教のる我
もく法本の難を持るなる
法なる吉野の風景を称せは
なる吉に花はひちる我名
学自の衰示称高ふ人間
此觀相をこゝにゆくたん
其所のその花はちるは此師な
此實我結へ〇ふ山

地ゝ〻ハ本此宮の花芳郭哉　李時
礒北松そんゝすきゝらゆ千ゝ　吉田氏可改
仍おもや面不人同此築地也　秋中　雅紀
梅二本　東極ゝ此野ゝ南　向ゝ西堂
白紙ゝに書ふゝ書ゝぬ胡蝶哉　日　富房
茅ゝ林一庵一ゝ其ゝ茅ゝ梅の花　京　吾仲
吹風に舟茅ゝ流すゝ柳ゝ雑　日　范孚
鶯ゝ鳴ゝ去野ハ新此宿ゝ下　大津　宰陀

孫ゝん忘や東福寺ゝ帰ゝて　国入
己春此ゝ山やすらゝ雑ゝ多ゝ　日　袁立
新清水此ゝ書ゝ世ゝ形ゝ柳ゝ　巴静
山ゝ中ゝ蛙ゝ峠ゝ有ゝ足　長氏　嘯毛
山ゝ郭ゝ霞ゝ立ゝ〻ゝ鳴ゝ鶯ゝ　李孔
飛ゝ初ハ胡ゝ蝶ゝ〻ゝ有ゝ白ゝ蝶　春士
蝶ゝ此白ゝ〻ゝ〻ゝ初ゝ茅ゝ束　尤杞
春ゝ野ゝ年ゝ〻ゝ鳴ゝ茅ゝ束ゝ鶯　百陀

上臈の花も菖もすゝ摘み蕙（ミゾキク）　幸子
其後ハ羽根に留る蝶の飛　月　台太
山吹や蝶ハ菜種をはなれ顔　日　水胡
笠の上ゟ雨は柳のしつく　小大　墨孔
大根の花や抜けし朧月　笠松　達女
縁葉に飛代はらく回り小　日　慶山
風すんてあをき柳にむら燕　日　楚柳
禧子あく表銭訊く雨桜の花　五キ　宗三

永き日を桜に暮せる柳かな　蒔中
山風にあふ水音も野や世の一聲　竹枝
鶯の宿ハ見直すの水一と猿の声　壺翠
蝶々の花盛りて見る風車　立和
菜畑や十人前の一ヶ先見　其東
むらさめの中に揺るゝ柳哉　猿之
永き日や帰るまで人にこそ　黄蘆
戻るやかきもふと醒所に永き日帰りけり　此亭

其二月比降うかりてやもよ　カヽ大石寺　蝶　馬泉

一頃り　夕雪寒し　藤比花　秋原　山比　柏

山吉比見ん　ふとけハ　蕨うれ　こう波阜　梅因

吾盤比三分白し　梅比な　らう井カ今ケ　素麦

さ〻ぬや一生すく　竜　月　日七八　龍笛

柳うゝ京や　里うゝ　藤のも　イセ　ヨ五　五之

岩比知ゝ　時雨　日ゴ年　竹花

百比日の宮を　見ちゝ　日五ゝ　重考

海ん比ゝ　雛よ　あ桜や　桃比花　三毛

蝶ゝ比　華やせる　共比ちゝや　日　傘市　カナ字年

蝶ゝの　鼻ゆ　ちゝる　蕨うゝ　落伴

流比　ちゝを　ゆゝい　柳　比　流れ　久ケ　岸水

夕月　銀雪と　掬ちゝる　毛　雲蔵　日　風二

涼ゝ　ゝ　ゝ　知ゝ　見ゝ　久ケ　素掬　イセ　幾勇

蝶ゝ比　草を　見ゝる　海ゝ　日　埜士

ゝる　京や　山流　男　波比　見ゝ　ミノ　宗伯

七草や夏潮とあり麦を一畑　化丈（アジタカ氏）

詠るは月のよそれくもそる海ゆ　古泊

荷葉深山雨や稚ち揺くり　李高

芙蓉起しするや俗子は四寺蟬　仙木

興り星ゝ蓮ゝ乃ゝ梅柳　楚由

貴やとひ初る月は源ゝ船　豊化

一番し紀空にあそふや風中（古法川）　三口

庭蛙ゝ は一日ちゝゝと柳一ゝゝ土山　花師

初年や日和ゆるる篇は七夕

七夕や菜畑を経待れゝ　花頃

書麦の風は月は雑るの夕　竜兄

本秋は久ゝ孝ゝられゝ花乃哉　時節

ちゝゝ咲一枝くは月枝ゝ　一水

一日を十日は秋を蓮ゝ　合之（中田川）

菜畑や花より見ゆく時雨　莞雪（信州サダ）

空ゝやと石やおりゝ藤の毛　紀定

清くゆく雪ふり降れる雪の面　雪中
咲る花の蕾のいこまる梅　花
梅ゝ咲花　秋はたちるや寺院　二も
咲ゝ咲花　春ゝ春ゝ鶯　今大　風春
雪ゝ雪や雪　舞ゝ雪　陸舟
梅ゝ咲梅　梅ゝ咲梅　梅ゝ咲梅　好文
梅ゝ咲梅　梅ゝ香　流水
咲ゝ咲梅　梅ゝ咲梅　風和

咲る花の蕾　柳ゝ　ツレ　蓮松
咲ゝ咲花　咲ゝ咲花　日　赤花
炭窯の炭　白ゝ白ゝ　日　李林
白ゝ白ゝ　柳ゝ　日　如意
暖ゝ暖ゝ　日　柳ゝ　日　柳ゝ
出ゝ出ゝ　出ゝ出ゝ　日　九南
抱ゝ抱ゝ　抱ゝ抱ゝ　カヽト　松野
抱ゝ抱ゝ　抱ゝ抱ゝ　カサ寺　きんめ

杉風が芭蕉庵を訪ぬる時

百人首を新たに新やの若菜哉　杉風

たこなれそこなけくれ柳うゝ　曉書

二月や野と山へけそふる花の雪　陳嵐

菅原や田舎ゝ花と京の春　山中

あれ年く風や物ゝる氣ハ美　蕉里

うとこれ初り落し雁月　三湖

引れ出し人ハ隔てし柳ゝ　其角

千夕　比皆

拾遺抄の四月五日より桃の花　曉志

必象や柳の花に吹ル来る　巴斎

屋ゝ月ゝ桃ゝ垂そやの小家　桃角

小ル名の息ゝほとけく柳ゝ　樓五

柳ゝ下の碎の柳ゝ　和木

学やゝ人ゝよこ乱く芝草の　象来

我木をおくこ年やの雉子の　吟之

時く鶯来く啼ゝ橋本哉　百花

御手とゝのへられぬ墨も田螺うる　横手　素谷
鶴ふさ家や梅ふくをする川べり　巴静

夕立にぱりぱりうるや竹べり蟻　丈艸
鶴くゝ於業べ偏きや杜若　去来
綿畑や柳べ花べ蔦あるく　木因
富べ俳べ生べ山や田茅原　桃妖

京に城や行べ出るハ生と伊勢角　イセ　急士
ふるべ世や雪ふ降べ雨べ寒べあるべ　寒砧
涼べ月べ豊ふハ姉と清べ花べ多　執筆　倩彦
頭巾べ投べ出べ伊べ多べ菓べ　大安寺　友硯
泳べ水べ鄙べ向べ百合べ花べ　宗坊
眺るなと蜻の乾べ多べ百合の花　越智千代　楚由
松風べ聲べ長べ蛙べ蝉べ梅べ　百池
川猪や家べ祝べ梅べ　尤杷

柿園搗れすてこも破れたる　惟人

夕部や江戸の人の畑　はせを

蕭園忘れ蝶の舞ひや牡丹畑　春士

薩佛や牡丹の人こころ　巴静

紅イ　されとうるるや蓮の葉　素水

思ふ人に涙あるつき粉の哉　嘯竜

宗祇の花あと哉　京　吾也

山も蓋ふ雨ふるや船てふ夜　日　山点

沉船やきれたる日の花　大石寺　関吾

爲帽子ぬ雲たゆる牡丹　日　荒角

蝶の花ひらく程ふ若葉　日　波虹

一ツ手に持て更衣　ノ子　伽山

動くに見るとも所あるとも　日　湘水

あの花葉も深よりの芭蕉　日　老葉

見くるる宮やうの蕭　日　枳水

すこ笠ぬ同る物見せん時雨　日　小竹

はれに孫と書て　日　孫化
竹に子に一徳ゆるや一次　儀アヤ　之海
卯に毛に繁る　繁に　日　不尺
藤に紙に出る　紙も　織　一海
秋に月に　月に　ウ山カタ　右滝
草に月に　月に　日　栗ル
初雁に門やうけ　あや　ケ　有琴
結ひ　日　吉宗

菜に蓮に　日　泊船
引波や川なうに　笠松　其由
花に月に　日　海棠
石に月に　ト　扇
猫に　小方　夜仙
作に　日　比郷
若に　日　望た
百に　日　風葉

敷妙の袖に及ばぬ涙かな　沖戸

秋の来る蝶や羽なれ衣　李嘉

いそぎ物はしり儀くゆれす　杜若　木云　息の手

菜はもやを付ると　梅　日　宵田　松窓

竹はやさいと　桜　日　柳志

明すや色の深らゆかぬ　寸　李仙

寒かと時雨の白し　日　桂頂

青柳の春のうゆく末の　スヒヲ　風白

蔦の葉の赤くなると　竹カケ　才六

秋の名残を結ぶ　葉名　里主

更衣むつかしや　牡丹　トアリ　杉寸

人形は三月やい淋し　日　弱軍

竹はるは此こ釈の明り　日　花白

此庵の宮の高山　ケヲ　爾牛

柿苔の人の望とを夏木立　日　室和

卯の花の藤は花の　岩ケヲ　寓之

花はるかにさかぬ遠山　一重咲　日　角子
呉服やはなかたうり　一重咲　中山　嘉通
人数の雨をかるや夕涼　日　桃雨
新雨のはれ新雨のはれをすりぬぐ　三浦義　芋角
白雨はすでにたちぬや藤棚裏　イヌ山　隆口
雨上や蓮の花さけばはれ　日　九雄
雨はれ雨ひく涼し　伊勢山　日　露計
新雨のはれ息をつかれいくこゑや　三河　秋光

月ひく川さはすや芋　芋井ノ　及梅
源河義京へ上るや雨蛙　日　巴月
法川ふか鏡はるやゆすみ　日　州岳
笠掛ゆ日や山くれしつも夏　京ノ　九軍
若竹はたくひの用や新宿の戸　十町　素琴
あれはなくなるぶ　信州井ノ　芭蕉
倚りかる新し持ちかけ夕すず　日　以拙
夏陰や出るく鳴ふれはれ言　日　和川

清さをれうの笹ゆ　花清
白面や檜に むらがれる日筆　あしで　柳風
三重藤すゝ黒く蝶の巣　十ウ舟　はるゝ
卯に花や桜ゆるる鶯の　三ウ　序智
深人に花ちるくりの影哉　七四一　可友
庭和の花ゆ照り合ひ　部い雨　相水
篠切り稲ゆ刈りし男ゆ　三ウ　猩や
雨ゝあり麻さ丈ぬ家に男ゆ哉　日　玉こ

挑燈ゆ見灯ゆ舟ゆ　日　宜角
涼風哉ゆ書切ゆ雨蓮　日　泉次
白面ゆ花ゆ猩ゆ　三人　相湖
竹に花ゆ蝶入れゆ東化粧　七　巴な
蓮に葉ゆ雨ゆ蛙ひゆ　日　茶扶
あちこちゆ雨合に夜哉　日　風野
柳ゆ風ゆ雨ゆ形に白ゆ哉　日コモリ　已ゝ
花ゆゆ立角に柳ゆ家一さよ　ヒ三郎　南女

ぬふるゆ柳就ゆ　こころてへ　千里
霧深月小蔵るうら草の　日　物心
甲まも水深沼ひすこ哉　日　えも
黒ほけ　あこ海八定し百合の　日　伴水
時く吹杉ひ白ひ也青風　つこ　市松
杉ひ　ひ草ひ　ひ　日　青二
定草ひ神に拙足　日　不知
死ひ　ひ若葉和風ひす百物　甚月寺　化蝶

切刻ひ色ちる毋ひ白ちる哉　よこ　三風
ひ水ひ　ひ　ひ郭ひ　ひ　上人　推之
情ひ白を撞ゆ赤く　論ゆ多　巴静
黄ひ和　弱ゆ蛙屋ひ　白所
吹就ひ毋ゆ海ひ　ひ　不国
切ひ　ひ撞ゆ波ひ引ひ　ひ　花嵐
清仏ゆ　ひ　ひ猛ゆ　ひ　十山
ひ　ひ波ひ風ゆ　ひ　春雨

茅花の雨降れば
色新やかなる花菖蒲
作花の傳へも
彩雲紫よりて初め
咲く花の
紫陽花の雨や
本地川花菖蒲
梅雨月花菖蒲
一湖

同氏
茅花
山林
龍胆
馬六
菖蒲
原来
以之

雨会の葉陰
清水花菖蒲
百川の
山里や
傳へ夕時雨
流川や
元山の雨
笠花輪やまこ
白鷺
白鷺
蛍五
白鷺
墨浦
蛍宮
貢架
蔵
南瓜

しき沼より晴すや矣湖に白月　秋　羅三

笠梨ちるく音羽の庵　よしなし　番九

山風に吹ん〻りやの花は　巴静

ちるく〻と山の花ぬ有哉　和石

竹ゑや沒おくは此長閑る　里三

石井や垣根に歌くるる乱　以之

拙に長き碁小蔵より〻る　臺正

雑喉ゑを獨り沼る牡丹鍋　里和

拙に詩より疎上げ此沼や駒迄　評六

ヤ明ふ行くり日や沼の秋　原兎

拙を雲に川西て和に川　ミノ山カタ　白雄

鶴書や蛇の乃ぬ出を乱上　同　朱羽

天人に長下明歳　月乃ら那　同　六之

玉柳や陸仕に暗く此乱　幸正

ゑ乱く沒音素ゑ時や乱ゑ　仲カチ　夕湘

藁

二月に入るとやがて春林
鶯は春を知りそめ麻は芽を出す 同 稲苗
高く茂る頃蝶もあり沼は川 同 書古
百草に花咲通り蛙は田 同 春畦
れは花咲も茂れば実もひろち 同 杜若
咲るまい間を蛙や鶏の鳴 同 蟬如
起くは塩なにあく木槿の散 同 菜蔬
西は花やはれを咲るく蝉と茂る 冬 千鶴

鶴さ鶏花咲くまれいろの秋 同 蓮
三日月のひつを鶏なるを花載 同 可鶏
拍子茂るこれ秋て花茂の鶏 同 乙子
帽子は鶏ろ鶏の寄ちるを 冒 花菓
小男鹿は鳴き里信ん紅葉笠 同 千葉
葉は猫や寒ろる上は鶏ろ 二毛 鶏く
一枝ぬて日中又茂る本槿載 同 海泉
刈鶏は茂る行れの中は多 同 桃山

陽丸越すとする言葉我が楽山 日宿
清水もあるとも如水 日
雄も言葉あり其の月 松の雪 日 鄉石
夕雪の山まハ月のあるとき哉 已ニ書 久世
寒中の花たゝる秋の明るゝ 前参内氏 志計 千歳女 季蝶
大雪の雪や蕨くきるとくす 日 松巷
鶴部や今鶴ハ一婦月五郎 日 芳葉
ハ言葉や一源の月 日 青巴

一ゝ雪の雪の花の月 日 野や
伊の山も霞ゝ雪一ゝ 日 鶴屋
鶴部なほのゝ山の鶴ゝ 日 芦室
月の一ゝ大や小ちゝ 日 松彩
日ゝ雪ゝ雪ゝ月や魂ゝ 日 鴨遊
月の雪ゝ雪ゝ月 日 立新
月や雪ゝ雪ゝ月 其中
山の雪や今酒ゝ秋の雪 中川 鶴名

初秋比松や縮て菜字の書　京　吾仲

白妙や咲たてそるを一渡り　日柏己

十六相や松ふい園比清と　紙中　蘭七

海と秋比比比若さや竹比　志時　百五

鶏頭や片恋みるを一東　日竹路

秋比勢ふ雲ひ鳴る日哉　千作

蚊や海ひ蚊宮ひ場ひ魂尽　素分

物ふ屠や比比蚊ふ日ひ雑宿一　色代　比文

世中や蚊や貧ひ相を懐ふ　巴静

相撲比鶏鳴比花ふ咲ぬ　山朴

朝鶏比沼ひを一ふ桔梗哉　尤把

蹴比柏ひをひ秋や竹比蚊　以之

ひ鶏比秋祝ふ来ひを蹴簷　竹尤

菜畑比ひを比拾ふ月相哉　宗旭

秋ふや藩ひ見比色　東柳

秋い来く柳ふ鄭く比桔哉　見菜

五山北条時宗ゆるすに北月　井ウ　東路
拾八年時宗出家法名　日　甚得
禅定寺殿御一期記　日　急名
新新田日新待はのおはやや　文　野れ
智義捷こ月形くせるる心哉　イ本　明六
秋立や府見渡すぬるさる　日　舞流
名月哉異なるもてる新あるる　二井ウ　集れ
酬恩寺明うこ拾ふやはやしきり　ニ　志計

芝栗北条帝鬼きーー和化仲間　朱家
名の月ことこ（ろん）陸奥の国　多　楚由
川原や邪見いあるこに九月者　日　演筆
名月舟やいを変ものこ年竹　日　酔川
咲ふ見る紅葉仏着戸北主国川　本寺　光明
年我帝ふ拾ふこ酔　日　学来
名月ふ富樹北数の濃れ雪　キヨス　琴市
酔ふこるかいくやはの雪　日　呉雪

白帆を二艘に流すや吉野川　白
家内いまと暮るる業に忙　桜笠
其中に小船をもたる蔦哉　桜月
相撲業の帰るく桜蔭哉　東窮
庭内に鶏やいそく月の雲　一雪
次第に異国と相寒哉　任風
永日碎覚す思ひ出に陸哉　佳木
秋立や業の相撲の見物　不遠
鶏頭を泥に成れとうち　素豚
家一さの恋の陸やもろく屋　可柳
鶏頭に恋やうひに情こ水　高蘭
撲の寒く碓を業ぶりの面　東茶
九日や二ゐの世業やも栗の業　落巾
鶏頭に恋の夕顔　世議　百陀
木うゝ四ゝまで業の迎るや九月　尤杷
栗栗に世之の陸るや九月哉　麦士

松嶋は弱木蓋し一芳野の花　素谷

海あらしや花吹れかる松の雪　松石

名月や松原見せぬ海北寺　以之

名月や鼠ぬけ出る松の頭巾　巴静

名月や五色出て松の新　其角

五湖来れ鼠ぬけ出る松の月　蓮家

歌

此くまの山さくらの事ども

とはばやと思ふ人の心ぞ

鶯の声ばかりなる春の山

芳野の山にかすみ立ちぬ

芳野山ふかく分入て

ゆきの中にはるの来ぬる

いかなる人ぞ問ばこたへん

菜原下
四十五歳